

御土あかし

第28号

発行 あさる野市教育委員会 東京都あさる野市二宮350 電話 042-558-1111 FAX 042-558-1560

新たに市指定文化財となった絵馬二点に歴史を読む

— 真照寺の猿曳駒絵馬さるひきこまと二宮神社の算額絵馬さんがく —

齋藤 慎 — (武蔵御嶽神社古文書学術調査団委員)

(1) 引田山真照寺所蔵「猿曳駒絵馬」

この絵馬のつくられたのは天正17年(1589)。その翌年天正18年6月23日に八王子城落城、7月5日に本城小田原城は開城、後北条氏は豊臣秀吉へ降伏するという緊張した年代でした。絵馬は17歳の志村角蔵という青年武士によって刻まれ、平山氏から引田村の領主に任じられている角蔵の父志村肥前守景元により、引田の山王権現へ奉納された版木を兼ねた珍しいものです。平山氏は後北条氏の家臣でした。

絵馬の表には、明神型鳥居を背景に、武士ごのみの立派な体格の、立髪をととのえて結髪で正装の馬を山王権現の神使の猿が指縄で曳いてひざまづく図



この切痕は紙片の上を裁断した痕か。

真照寺の絵馬表面拓本

を陽刻しています。

ずいぶん長期間、版木として使用されたため磨滅し墨で黒光りしていますが、材質は硬く桜と思われる。寸法は縦23.7cm、横16.7cm、厚さ1.2cmで縦長、二つ折した半紙と寸法がびたり同じであることは大事な点で、はじめから、紙製の絵馬を刷るための用紙に対応して作られているようです。

1600年代初め慶長検地の村の生産高を伝えた『正保武蔵田園簿』の多摩郡の由比領・三田領・小宮領には紙の豊富な生産の事情を伝える「紙舟役(紙すきの舟への課税)」が田方や畑方の高と並んでいます。引田村の近辺では、網代・平井・大久野・三内・伊奈他の村々がありました。

紙はかつては貴重で、昭和前期までお正月の挨拶には必ず水引をかけた半紙一帖を添えていました。絵馬の用紙を生産していた中世の小宮谷を想像させます。後北条氏も、紙を貢納させています。

なお、この絵馬は江戸時代後期の官撰の地誌『新編武蔵国風土記稿』や、調査した八王子千人同心の植田十兵衛が昌平鬻へ献上の『武蔵名勝図会』にも図入りで記載され、古額=絵馬として「山王社」に掲げられ、後に養蚕祈願の紙絵馬として「真照寺」で刷られたと述べられています。

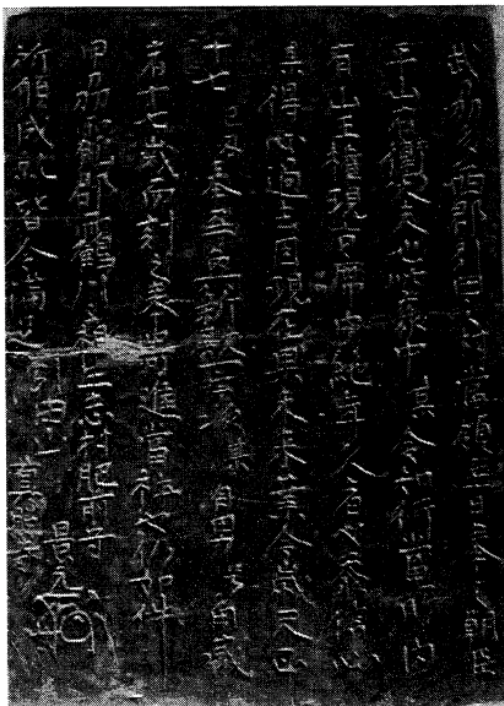
この絵馬は、信仰上は額としての絵馬と、手がるな絵馬の普及の版木と二つの機能を持ち、紙すきや、養蚕という生業の存在までも語るのは貴重です。

ちなみに二つの地誌は、八王子市域の下恩方村の浄福寺観音堂に天文25年(1556)正月21日奉納の牛若丸と弁慶の一对の絵馬(各、縦60.6cm、横39cm)の存在を記録していますが、残っていません。したがってこの天正16年の絵馬が多摩郡はもちろん、東京都内でも最古の絵馬ということになります。

この絵馬の裏には、意識すると次のような文章が漢文で陰刻されます。



真照寺の絵馬表面



真照寺の絵馬裏面

「武蔵国の多西郡引田村の今の領主は平山右衛門大夫（氏重の子直重か）です。その家臣で甲斐国の鶴郡の鶴川村に生れた私（志村肥前守景元）が、その引田村を知行地（給与としての土地）として支配

をまかされています。この村の古社山王権現が長く廃絶していたので、私（志村）は将来の幸福を祈って今年天正17年（1589）に新しい社殿を造営した。その時に私（志村）の次男で17歳の角蔵がこの絵馬を刻んで山王権現に寄進したのです。志村肥前守景元（花押）。

なおつづけて「所願成就皆令満足」「引田山真照寺」とある文字は、配置が不自然でそれまでの文字と彫り、書体も異なります。山王権現の別当として真照寺が版木絵馬を管理する（紙絵馬を刷る）ようになった年代の追刻です。また、「某」は謙譲の一人称で、文字を小さめにするのは、神に対する慎みの表現です。「天正十七」の干支の「己刃」の「刃」は「丑」の異体字で、五日市高尾出土の板碑に例があります。

平山という後北条氏からその土地の支配を認められている領主が、この土地の所有者ではなく他国（甲斐国の鶴郡）の人を、自分の家臣（被官）に召し抱え、給与（知行）として村の支配を委託するという関係です。昔からの苗字の地に密着、全面支配した土豪ではないのです。『小田原衆所領役』などにもみえる戦国大名の新しい支配と所属関係です。江戸時代の大名と家臣団は、支配地は幕府からの委託で、軍役に服するという「幕藩体制」への移行のきざしがみえています。

絵馬奉納の翌年、天正18年7月5日に平山右衛門大夫の属した後北条氏は豊臣秀吉に降服、平山右衛門大夫直重も早く6月23日の八王子城落城と共に討死したことでしょう。豊臣勢襲来の緊張感はそれ以前からで、天正16年（1588）正月吉日付の、小田原の本城の命を以って八王子城主北条氏照は、小宮谷の西戸倉の人々に「此の度の御弓矢（豊臣勢との合戦）に就き、当郷に之有男たる程の者は」「平山右衛門大夫一左右（命令）次第」「彼の谷（桧原谷）へ相集り、走廻るべし（奮戦せよ）」と軍令を発しています。軍令は村々や職能集団ごとに発せられているようです。18歳の若武者角蔵も父の志村肥前守と共にこの合戦に出陣したことでしょう。

単純に『正保武蔵田園簿』による慶長年代の志村家の知行地の引田村の石高約250石を一貫文五石で換算すると、天正の頃の後北条氏軍役の規定で、志村家の負担する軍勢では騎馬で甲冑姿の武者は5騎程度です。そのうちの1騎18歳の志村角蔵の最後まで討死であったと想像します。

しかし、その前年、角蔵が武家ごのみの見事な馬を権現に納めた素朴な猿曳駒の絵馬は、小宮谷の村々の人々の豊饒を祈るための神前へのささげものとしての多くの紙絵馬を刷りだす版木として大切にされ、ながらく伝えられることになったのです。

(2) 二宮神社所蔵の「算額絵馬」 (あきる野市五日市郷土館保管)

真照寺の版木と、それによる紙絵馬のような、板や紙の絵馬は、実際の馬より奉納しやすいので社殿の長押や壁では収容しきれず、境内に絵馬殿(堂)、額殿(堂)という奉納展示用の戸じまりもない建物が出現します。武蔵御岳神社にはかつて立派な額殿がありました。

また江戸時代には物語・芸能のはなやかな場面の絵、詩歌・俳諧など文字を主とした絵馬額になります。

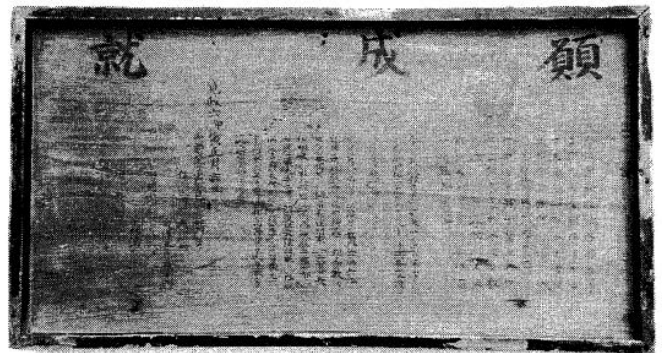
宝暦年(1770)代の川柳集『柳多留』の中の「雨やどり額の文字をよくおぼえ」などは、寺社の軒まわりの縁側や、額堂、絵馬堂に、人々が集り、絵馬を楽しむ折があったことを伝えているのです。

そういう鑑賞的な絵馬を集めた刊行もありました。京都の寺社の絵馬図録『花洛絵馬評判』、江戸では『武江絵馬鑑』・『東都絵馬』です。あきる野市にも、そんな本にのせたいような鑑賞的な絵馬がいくつもあります。

特に、江戸時代初期に出現し「算法の額」とよばれ、日本式の数学の和算法で出題した問題と解法を示し解答した絵馬が今度あきる野市の、指定文化財になりました。「算額」と通称され、神前に掲げて、数学的、論証的能力を公開する絵馬です。数学の力量向上の祈願というより、自分たちの数学的能力を神さまに(実は同好の士に)見て頂こうというもので、真照寺の絵馬などとは全く異なる、新しい発想の絵馬なのです。

額面は、問題が二問、その解答、そして解法が、和算用語を使って漢文で表記され、問題となる図形が示されています。こういう形式は、他の算額も同じで、祈願というより同好の士が考える楽しさを披露するという特殊な絵馬といえます。絵画、色彩のたのしさはなく、読んでたのしむ地味な額面です。

額は杉材の節なしの板で、墨彩色の黒い額縁で縦は49cm、横は89cmほど。上方に「願成就」と横書



二宮神社の算額絵馬

きし、その下の左右に直角三角に内接する円や正方形を描き要所に垂線をひき、内接する大きい円を朱彩色し、各部分に名称を記入していますが発見された『秋川市史』編纂当時にくらべて劣化がすすみ、磨滅してよみにくいので別に図示します。

なかなか難解な漢文なので、問題と解答だけを和算用語は〔 〕で、現代語は()で注として、現代語訳してみましよう。

まず第一問目の問題(題意と条件)は、「図示した〔鈎股弦(直角三角形)〕の〔弦(斜辺)〕に沿って外接して並ぶ五つの等しい直径の円があって、内接する大きな円の正径は〔四十四寸(44寸)〕ある。また〔弦〕は〔一百一十寸(110寸)〕ある。さて、相互に外接する五つの等しい円の直径はどれほどか。そして、答「それらの直径は〔一十六寸九分二三(16寸9分2厘3毛)〕である」。解き方は「術に白わく…」以下にのべられているのです。

二問目は、「図のような直角三角形がある〔鈎(左辺)〕と、斜辺を直角からの垂線でわける長い方の斜辺の長さの和が〔二百零一寸六分(201寸6分)〕ある。また左辺の長さ、内接する円の直径と正方形の一辺の和が〔百八十八寸(188寸)〕ある。〔股(底辺)〕の長さは、いくらか。」が問題で答は「股の長さは〔百十二寸(112寸)〕です」。

前記したように、文字も図形もうすれて読みにくいので算額研究家の佐藤健一氏や山口正義氏の文献によって、活字化、補訂したものを図示しておきます。二問目の6行目と9行目の傍線部分に誤記があります。山口氏の注を参照してください。

寛政6年(1794)正月吉旦のこの算額は、東京都域では最古の国立市谷保天満宮の寛政5年4月吉日の遠藤保利他11奉納の算額に次いで奉納です。しかし谷保天満宮の額は現存しないので、現在は東京都では最古の算額です。多摩地方にはかつて9点

の算額がありましたが、4点が紛失、現存するものは5点で、江戸時代のものは僅か3点ですから、貴重な存在です。

奉納したのは、八王子小比企村の染谷姓（染谷春房）の門弟4人で一人は遠く信州水内郡参歳村（現長野県長野市）の白澤五郎右衛門で遠方との同好の交りです。

以下3人はあきる野の小川村（東秋留地区）小林清左衛門、同森山村（多西地区）岸野浅右衛門、日の出の谷の入村（平井地区）東市之助です。千人同心組頭の塩野周蔵（塩野適斎の養父）に関孝和自筆の伝書をさずけたといい、適斎も和算を教授したと伝えます。関流の和算法が学習されたことでしょう。和算は天正19年代・慶長5年代・寛文8年代と行われた検地での土地の測量、面積計算、税率算出などですすでに実用化されてきたと思われます。しかし二宮神社に算額を奉納した人々は、そういう実学とは別に、数学的な頭のはたらきをあそびとして楽しみ、利益をのぞまない学問として学んだと思われます。こうした江戸時代の文化水準の高さは、やがてむかえる明治維新、また、近代国家の民衆として

新しい合理的な思考力や論理的傾向を体得していったことでしょう。真照寺の絵馬のような個人的、現世利益の神仏への祈念から、出発とした絵馬から考えると、二宮神社の絵馬にはずいぶん進歩した近代的な知性や感性がこめられた絵馬になっています。

この算額絵馬には、いちはやく近代にむかう多摩の人々の合理的な思考力の発達がよみとれるように思われます。

末筆ながら、本稿の執筆にあたり日本数学史学会運営委員長小寺裕氏並びに執筆者である佐藤健一氏におきましては、資料利用に際しご協力いただき大変ありがとうございました。心より感謝申し上げます。

（引用参考文献）

- 『秋川市史』「絵馬に見る近世の風俗」 齋藤慎一 1983年
- 『戦国遺文 後北条氏編1～6』 杉山博・下山治久編 東京堂出版 1989～1995年
- 『数学史研究』146号「東京都秋川市の算術」 日本数学史学会 佐藤健一 1995年
- 『あきる野市の二宮神社の算額』 山口正義 2015年

就

寛政六甲寅正月吉旦
當國八王子小比企邑染谷姓門弟
信州水内郡参歳村
白澤五郎右衛門

當國小川村
小林清左衛門

同 森山村
岸野浅右衛門

同 谷入村
東市之助

成

願

今有鈎股弦只云股與長弦和二百零一寸六分又云鈎圓徑方面三和一百八十八寸問各幾何
○答曰股一百一十二寸
術曰立天元一為股○以減只云數內餘為長弦自乘之以減股餘為中鈎幕○列又云數以長弦幕相乘股股幕長弦相乘股股幕長弦相乘股右三位相併得內減股再乘幕二止餘自乘之寄左○列股以長弦相乘股內減併減又云數長弦相乘股股幕一餘自乘之以中鈎幕相乘之與寄左相消得開方式五乘方翻法開之得股合問

「額面の全体」

佐藤健一氏の「東京都秋川市の算額」（「数学史研究」一四六号所収）を「あきる野市の二宮神社の算額」で山口正義氏が補正したもの。

（山口氏補正）
注傍線の「股幕長弦」は「股長弦幕」に、また「減」は削除